

## 弘前大学はやぶさカレッジ・新カリキュラム 参加者の面接からの一考察

### Considering Participant Interviews for Curriculum Reform in a University Honors Program

多田 恵実\*

Megumi TADA

#### 要旨：

弘前大学で平成25年度に開始された弘前大学HIROSAKIはやぶさカレッジは、学生が参加費不徴収の短期海外研修に参加することのできる、国内でも稀有なグローバル人材育成プログラムである。すでに第1期から3期までの学生を輩出し、平成28年にカリキュラムの内容を一新して継続しているが、学生から見たこのような研修プログラムは彼らにとってどのようなプログラムだったのか、新カリキュラムが適用されたはやぶさカレッジ第4期学生全員との面接を通して探る。

キーワード：短期海外研修、自立学習施設、異文化理解教育

#### 1. はじめに

留学プログラムは教育と本当の世界を結びつける力があり、学生が異文化理解を通して自分自身について学ぶ機会であり、人生を変える力がある。“After studying abroad, I realize how important experience is to education. It teaches you about yourself, your culture, your host culture, and most importantly, it helps you to connect concepts you have studied in the classroom with real life.” (Brewer & Cunningham, 2009) しかしながら、経済的にも、機会の面でもそのチャンスに恵まれる人間は限られており、個人レベルで受けることのできるリソースも圧倒的に少ない。

弘前大学HIROSAKIはやぶさカレッジは短期海外研修を通して、学生がそのような機会を得ることができ国内でも珍しい貴重なプログラムである。筆者は平成25年からその英語教育部分にわずかながら係ることができたのだが、平成28年にはカリキュラム改正があり、そのカリキュラム変更と短期海外研修プログラムの効用を学生の面接を通して確認するべく調査を行った。

#### 2. HIROSAKIはやぶさカレッジの概要

弘前大学『HIROSAKIはやぶさカレッジ』は、当時の弘前大学国際教育センター、現国際連携本部の鹿嶋彰准教授の発案・シラバス起草の許に発足した。平成25年7月に募集を始めたHIROSAKIはやぶさカレッジは、グローバル人材育成のための独自の教育プログラムとして平成25年10月に開講した。主たる構成は①英語、国際交流科目等の学習プログラム、②英語圏及びアジア圏の各大学への2回の短期海

\* 弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター

Center for Liberal Arts Development and Practices, Institute for Promotion of Higher Education, Hirosaki University

外研修を大学の全額補助で、そして③英語による修了研究となっている。はやぶさカレッジ生は2年と半年間のプログラムのあいだ、語学習得部分のために弘前大学イングリッシュ・ラウンジで英語のセミナーを受け、会話練習を行うと同時に、留学生とともに国際教育科目を選択履修し多文化環境での共生力を養う。イングリッシュ・ラウンジは平成24年にオープンした弘前大学の自立的英語学習施設である(中村他、2015)。全学部生が、各々の空き時間に予約を必要とせず自由に出入りし利用することができ、短時間のセミナーや会話練習、PCやマルチメディア使用の自主学習ができる施設である。はやぶさカレッジの語学習得部分はこの施設を利用して行われ、筆者は教養教育の英語担当とともにこの自主学習施設の教員としてはやぶさ英語教育部分を担当し、英語圏海外研修のプログラム作成にも一部関わった。発足時のはやぶさカレッジは1)言語コミュニケーション能力、2)多文化環境における共生力、および3)自国を相対的にとらえる力の育成(弘前大学「HIROSAKIはやぶさカレッジ」細則、平成25年10月1日細則第15号)を3つの教育目標の柱とし、『世界人』の育成を目的とした。言語コミュニケーション能力としては1年後期から始まり、3年前期の修了時、TOEFL iBT 68点相当以上(TOEFL IP 520点、TOEIC 645点相当以上)を達成する。修了研究テーマに沿ったプレゼンテーションおよび論文を英語で提出し、ここにもイングリッシュ・ラウンジが英語教育の一環として関わった。

### 3. 新はやぶさカレッジの概要

平成25年に開始されたはやぶさカレッジは、1期5名、2期6名、3期6名を輩出したのち、細則が改正され平成28年に新たなプログラムを開始するに至った。主な改正点はコース設定を1)言語コミュニケーション能力育成コース(以下、言語コース)と、2)多文化環境における共生力育成コース(以下、多文化コース)の2コースとし、募集人員は全体で各年度12名程度と増えた。主たる変更点は、①本プログラムへの選考前に希望者がエントリー学生として登録し、一定の科目の履修を終えたあと次段階で本プログラムに進む学生を決めるエントリー制の採用と、②参加費不徴収の海外研修先が各コースでそれぞれ一か所ずつに分かれたこと、③カレッジの期間が1.5年になったこと、④修了研究が論文ではなく、英語での修了報告のみとなったことである。

まず、1年後期に短期海外研修プログラムに進む以前の学生を、募集人員より多い人数の学生がエントリー学生として登録をする。そのうえでエントリー学生は英語科目としては、イングリッシュ・ラウンジで指定されたセミナークラスである *Intercultural Communication* を2単位必修として1年後期に、一方で多文化環境での共生力、異文化理解などに関する科目としては、同学期に教養教育科目のグローバル科目等の中から2科目4単位履修をし、その中で切磋琢磨したのち、1年次修了時に書類審査・面接のうえ選拔され、12名が必修科目である短期海外研修へと進むことができる。具体的には1)は英語圏の国へ、2)はアジア圏の国へ短期海外研修(各2単位)したうえで、それぞれが修了報告(2単位)を行うものである。

英語能力の修了要件として以前のTOEFLではなく、1)の言語コースはTOEIC L&R 600点以上、2)の多文化コースは同テスト550点以上と定められた。このなかで、筆者が関わった英語教育部分はイングリッシュ・ラウンジで行われる科目である *Intercultural Communication* と、英語能力試験スコア達成のための学生への個人指導であるが、はやぶさカレッジ生は日常的に彼らの語学能力を伸ばすためにイングリッシュ・ラウンジを訪れるので、履修の上での相談を受けることもあり、イングリッシュ・ラウンジの教員は日々の学習の遂行の上で少なからず持続的な役割を果たしている(Berman & Tada, 2016)。

### 4. 面接調査の方法

第4期のはやぶさカレッジ生は、言語コースに参加した7人と、多文化コースに参加した5人で、最

最終的に計12名が書類審査と面接とで選出された。英語能力試験を除く全プログラム終了後、前述の必修科目および選択必修科目や、英語圏・アジア圏の短期海外研修、修了研究についての以下のような質問紙を前に口頭で、30分ほどの面接を筆者と日本語で行い、フリートークの形で学生に答えてもらった。自由に答えてもらい、本人の許可を得て録音し書き起こしを行い、考察を試みた。

- ① What classes did you take in the English Lounge? How did it help your study abroad experience?
- ② What classes did you take as global subjects? How did it help your study abroad experience?
- ③ In what ways did Integrated English class help your study abroad experience?
- ④ In your study abroad program,
  - ① what did you learn?
  - ② were you involved in any educational activities outside the curriculum? (mainstream class? extracurricular activities? weekend excursions?)
- ⑤ Did you continue studying English after your study abroad? In what ways? If not, why not?
- ⑥ How did you feel about your presentations? Are there things you would change? (1<sup>st</sup> one? 2<sup>nd</sup> one?)
- ⑦ Did you have any of your presentations checked in the EL?
- ⑧ How many times and how much time did you get input on your presentations?
- ⑨ What was the most impressive part of the program? If you could change the program, what would you change?
- ⑩ What would you do differently if you were to start again?
- ⑪ What did you achieve in this program?
- ⑫ How do you want to make good use of this experience?

## 5. 面接結果

以下に各項目の面接結果の要旨を述べる。引用は学生のコメントの書き起こしで、センテンスは完全な文章にはなっておらず、口語表現もそのまま掲載した。またはやぶさカレッジ生の直接の同定を避けるため、12名の学生をHS1～HS12までの記号でカッコ内に付した。

### ①イングリッシュ・ラウンジではどのクラスを履修しましたか。短期海外研修にどのように役立ちましたか。

はやぶさカレッジのイングリッシュ・ラウンジでのセミナーは付録1にあるように、昼休みのランチタイムに1時間、Contents Based Learningの科目である、英語で行われる内容の授業を少なくとも一つ登録の上履修する。エントリー学生は全学部にわたるので、エントリー学生レベル1年次では、ほかの専門科目等との時間割の兼ね合いもあってのことではあるが、日本人教員のセミナー受講者が最も多かった(14人のうち6人)のに比べ、2年次正式にカレッジ生となってからは全員が2人いるネイティブ英語教員のどちらかの英語で行われるセミナーを履修している。イングリッシュ・ラウンジのセミナーは、自己研鑽のために学生が可能な時に不定期でも参加することができるので、履修登録したもの以外でも参加しても良いことになっており、2～3例ではあるが、そのような学生も見られた。

はやぶさカレッジ生に選ばれた学生の中には1年次に英語の初級クラスに所属するものもいた。その中には、ラウンジ・サポーターとして常駐する英語に堪能な留学生との会話練習を、所属学部が物理的に遠く離れているにもかかわらず週三回と頻繁に自主的に行う学生がいた。またそれとは別に文法、英語能力テスト対策で個別授業を希望して受ける学生もおり、後述の英語添削とともに着実に試験のスコアに結びつき、要件達成を助けた。

- イングリッシュ・ラウンジでは自分から発言しないと授業が進まないの、日本語しゃべらないので、当たり前なんですけど、会話力、自分のスピーキング力が上がったなと思いました。(HS4)
- 英語を使うのに抵抗がなくなった。スピーキングの面で力がついた。座学より楽しい。(HS1)
- 海外の話聞くのが好きなので、モチベーションが上がった。(HS10)
- (短期海外研修に)行く前に少ししゃべるのに慣れた。プレゼンテーションなどの課題が重いと思った。授業のほかに準備するのが大変だった時もあった。正規の授業ではない分、少し気軽に取れた。セミナーの内容を事前準備がいらぬものにしてもらったほうがいい。わがままなのですが、前の週休んじやってついていけなかったときがあったので。(HS3)
- (英語要件の)スコアの関係でTOEICのセミナーに出ていた。文法がだめで人に教えてもらわないとだめなので、マンツーマンのように教えていただき、とても感謝しています。(HS10)
- ビジネスのほうでは私の知らない(専門とは)関係ない経済に特化した内容が出てきて興味深いと思った。(HS6)
- 最初は何言ってるのかわからなかったが、イングリッシュ・ラウンジでは英語の勉強をしようという意識をつけさせてくれた。イングリッシュ・ラウンジがあったから、ここまで嫌いな英語の力を伸ばせたのではないかと思います。(HS8)

### ②グローバル科目は何を取りましたか。短期海外研修にどのように役立ちましたか。

付録2に示す通り、「多文化環境での共生力、異文化理解などに関する科目」は教養教育科目17科目、人文社会科学部専門教育科目1科目、計18科目から一年次後期に2科目選択し履修する。学生の面接からは、これらの科目の中には必ずしも直接的に短期海外研修に結びつくものではなかったものもあるが、これらの科目を通して新しい国際的な知識を広めることができた、留学生と授業を受けることができたくさん刺激を受けた、特に留学生と行うインターンシップで日本語と英語のバイリンガルで行われる授業には格別の感銘を感じる声があった。

- 国際共生論を取っていて、言語というよりは文化の共生みたいなのが、そこでやっぱり自分たちが考えている当たり前がもしほかの国に行くとそうじゃなかったとき、を授業の中で考えることができたのがよかったと思います。(HS12)
- ニュージーランド研究なのですが、人種差別、男女差別など、二年生の後期、セクシュアル・マイノリティについて学び、それでニュージーランドに行きたいという意欲がさらに沸いた。(HS1)
- グローバル科目は、カリブ海の国々、音楽などいろいろな国に興味が出た。小さい国々について知らなかった。文化や楽器に興味がある…行きたいと思った。取ってよかった。世界の映画史は映画なので興味ありとってみた。かなり昔の映画から今の映画。映画の撮影技術も。ぜんぜん知識のないところが、それが楽しくて。(HS6)

### ③Integrated Englishは短期海外研修にどのように役立ちましたか。

Integrated Aは教養科目の2年次前期の選択科目であるが、はやぶさカレッジのプログラム中では2年前期の必修の英語科目として位置づけられた。時期的には短期海外研修直前に取る科目であり、ネイティブ英語教員の英語で行われる英語の授業で、プレゼンテーションの作り方と発表の仕方、ポスターセッションなどが取り入れられ、英語でやる授業の効用とともに短期海外研修に役立ったという声が多く挙げられた。反面、必修にはなっていなかったIntegrated Bは、2年後期に開講されるが、短期海外研修後、英語の力を落とさないためにも、英語教員が履修を勧めていたものの、専門科目との重複で取ることのできた学生は一人を除いてはいなかった。

- Integrated AをShari先生で全部、英語で進められるので英語を使うことに抵抗がなくなった。とてもプラス。一年で英語を取ったときよりも距離が近く仲良くなれる。(HS1)

- Integrated AをBrian先生で、プレゼンの作り方を勉強できた。授業は英語で進められるので、リスニングの勉強になり、短期海外研修のための事前準備はそこでできたかなと思いました。(HS3)
- Shari先生のIntegrated Aはテンポ感がよかった。ありきたりの英語じゃなくて、動画とか、YouTubeとか、だれも考えつかないような。忙しかったんですが、忙しさが楽しかった。これやりなさいというよりも自分からやろうという意識が芽生える課題を出してくれたので、楽しかったですね。Moodleでのライティングは自分次第といってもそれがポイントになるので、自分からやりたくなるような動機付けになりました。(HS2)

④短期海外研修プログラムで、a) 学んだことはなんですかb) カリキュラム以外で教育的活動に参加しましたか。(学部のクラス、課外授業、週末旅行など)

学んだことは何かの問いに、集中したものはなかったのだが、多国籍の環境、世界観の打破、その国の文化、という文化面(3件)、自分で何かができる、一人で何かができる、という自己達成、課題解決能力または目標を探す能力という人格形成的な能力面(3件)、英語でやる英語の授業が楽しかったまたは良かった、英語の力が伸びた、英語の楽しさを知った(7件)という英語コミュニケーション面が挙げられた(複数回答)。

カリキュラム以外では、ニュージーランドでは大学が企画する2泊3日のツアーおよび、Friday Activityと呼ばれる大学の課外で出かける行事に参加した学生がほとんどで、その他にニュージーランドの日本語を学ぶ学生によって行われる部活動「お茶の時間」、そして午前中の英語の授業のあとに午後行われるNew Zealand Studyの文化の授業が挙げられた。ここでできた友人と、あるいはホームステイ先でいっしょのいわゆるフラットメイトと友達になって出かけたり、帰国後も連絡を取りあったりしている学生が多かった。タイ派遣学生は普段は寮に宿泊し、週末を利用してホームステイが2泊3日で行われたが、その体験は各家庭によってさまざまだった。

- 学んだことは、英語の授業のあとに文化・独自の授業があって、なんか、そこから、勝手に思ったことなんですが、異文化に対する寛容性、その人はその人だから、とか、タイはこういう国だから、とか、けっこう独立した目というか、自分が日本人という感覚が薄れる。受け入れて、受け入れてもらったという感じです。踊ったり、傘に絵を描きに行ったりだとか、カルチャー(の授業)は、必ず一週間に一回は必ず、出かけていました。(HS12)
- 英語とタイ語が軸で、あとはタイの文化を学ぶ。一か月でこんなにタイを知れる機会が多いんだと。英語もやって、タイの文化も楽しく学んで、一か月にしてはすごく内容濃く、タイのこと、タイの人のことを学べた。部活も二つ参加した。短期海外研修したら、学校が用意した人、元から日本が好きなお客としかかええないと思っていたので、現地の同じくらいのタイ人と知り合いになりたかったので、最初から参加する気満々で部活系のを全部持って行った。(スイミングとテコンドー)あとは、自分が行きたいところ、チェンマイのマップで行ったところがないところがないくらい、いろいろ行きました。(HS9)
- 短期海外研修では初めて海外に行ったのですが、語学力は大事だが、伝えようという気持ちがあればなんとかなる。全員に英語が通じるわけではないので、日本語が上手な人もあったので、コミュニケーション取る上では伝えようとする気持ちが大事。ボディ・ランゲージでも、伝える力、伝える手段はいっぱいあるので、その気持ちを持つことがだいじと思った。(HS10)

⑤短期海外研修のあと、英語の勉強を続けましたか。それはどんな方法で、やらなかったのなら、それはなぜですか。

修了要件の中に言語コースはTOEIC600点、多文化コース同テスト550点という規定があるので、TOEIC対策など英語能力試験対策のための勉強を挙げた学生は5件だった。ついで、日本語・英語を

使ったインターンシップの授業への参加は2件、そのほかは各種アプリの利用が3件、イングリッシュ・ラウンジの利用とIntegrated Englishのクラスの履修が3件、教育学部の英語専修学科でのネイティブ英語教員のクラスを挙げた学生が1件だった。続かなかったという学生はいなかった。(複数回答)

- Integrated B、週3以上でイングリッシュ・ラウンジ通いまくっていたので、強制されてではなく、自主的に自分から勉強していた。英語の楽しさを知った。流ちょうに喋れてないのですが、話せる人の幅が広がる、と考えたら楽しい。(HS8)
- 帰国後はTOEICのスコアを伸ばすため、後期、12月は結構頑張るとにかく勉強に力を入れた。…テスト直前は毎日時間を区切って問題集を解いたり。平均すると1時間くらい。…ラウンジに来てセミナーで。(HS10)
- 英語を勉強しようっていう心意気でやってたわけではなく、いろんな人とメッセージとかチャットすることが多くなりました。ラインでメッセージを録音できる機能があって、中国の方はよく使ってたので、録音機能を使ってやり取りするように。考えながらしゃべったり、聞くとリスニング、メッセージの電話もかなりリスニング力、スピーキング力がどのくらいかと認識できるもののかな。(HS2)

⑥～⑧修了発表を自分で評価するとどうですか。変えたいところがありましたか。1回目(短期海外研修報告)と2回目(修了研究)では。イングリッシュ・ラウンジで英語をチェックしてもらいましたか。内容の指導についてはいかがでしたか。

ここでは、『『自分なりに』、『自分的には』できた』、という肯定意見が最も多く7件で、評価をしなかったのが1件、「(自己評価は)あまりよくない」、と答えたのが1件、「テーマについての選定をこのようにしたかった、練習が足りなかった」としたのが2件、「アルバイトと授業でイングリッシュ・ラウンジのチェックを受けられなかった」というのが1件だった。

逆に言えば、内容、英語部分とも、両指導をほとんどの学生がきちんと受け、添削も受けることができている。内容についての指導については担当教員2名で分担し二組に分かれ、一方では隔週で定期的に4～5回のミーティングしたグループと、他方はその都度アポイントを取る形で2～5回の指導を受けたというグループがあった。なかには修了研究のために外出を共にしてくれたと、懇切丁寧な指導で、大変役に立ったとの感謝の言葉が学生から聞かれた。

- 担任は小山先生で、英語のチェックはブライアン先生。小山先生には過程を報告する感じで火曜日の一時間目に三人一組一人20分くらい、2週間に一回のペースで3～4回。ブライアン先生のチェックで内容がガラッと変わってしまった。段階が踏めてないと。締め切りに間に合わせて原稿を一時間くらい(かけて)。直しをメールで送りさらにそれを直してもらって(再度)メールで添付で送ってもらった。(HS3)
- 帰国後の研修報告と修了報告。修了報告会はまじめな話を、研修報告は来年の方のために楽しく。緊張すると真っ白になるタイプなので、英語も何度も見ていただいて、スライドは写真と英文を中村先生にチェックはしてもらって、修了報告は先に諏訪先生に見ていただいて、データとして見せるタイプというより行って感じたことを伝えるというタイプ。締め切りぎりぎりまで中村先生に添削していただいた。ラウンジには2～3回来た上にメールでさらに添削していただいた。内容は諏訪先生にご指導いただいて考えを話してアドバイスいただいて、はっきりしないところは先生に助けていただいて、個人的に諏訪先生に見ていただいた。諏訪先生に3回くらい。内容をテーマは変更をした。データとして見せるより感じたことをまとめた。(HS10)

⑨はやぶさカレッジのプログラムの中で最も印象的だったものはなんですか。また、変えたとしたらどこを変えたいですか。

やはりたくさん細かい意見に分かれたのだが、「語学」と「コミュニケーション能力」についてのものが7件、「世界観が変わった」、「自分でやる力」、「リーダーシップ」、「目標を見つける力」、「課題解決能力」を身につけられたなど、人格形成面が5件、「学友、フラットメイト」、「ホストファミリー」などの人脈づくりが3件、また「学内で留学生と行ったインターナショナルナイトが楽しかった」、「タイでのインターンシップが楽しかった」などの意見もあった。

変えたい部分としては、新はやぶさカレッジが変更後まもなく発表されあまり時間がなかったことに起因すると思われるが、「エントリー学生からははやぶさカレッジ生になるときの競争率をもっと高くして切磋琢磨させる」が1件、「学校側からの連絡・予定を前もって、余裕をもってしてほしい」が2件、そのほかはそれぞれ少数だが、「修了報告に関して行く前から計画を立てて内容の濃いものにしたい」、「帰国後に関して、「後期にもう少し勉強を推し進めるような圧力が欲しかった」、「留学生との交流会があればいい」、帰国後「英語要件達成のためのTOEIC講座がはやぶさのためにほしい」等そもそもはやぶさ生としての自主性を欠くような意見もあった。交流会や座談会を、との意見には「リーダーシッププログラムだったのですが、自分たちでやろうとは思わなかったのですか？」との筆者からの問いに本人が苦笑する場面もあった。また、TOEIC指導に関しては、前期と短期海外研修前に週1～2回のペースで定期的に1～3名ずつの個人指導を行っている。

- ・イングリッシュ・ラウンジがこわくなくなった。もともと抵抗があった。話したいけど外国人いるし。セミナー受けなきゃいけないけど、やらなければならないことが入ってくるし。ラウンジには来やすくなって変わった。プログラムの中でこうしてもらいたいことは、予定をあらかじめ余裕を持って決めてほしかった。前日になってこれを提出してください、とか。(HS1)
- ・英語の力が伸びた。5月から11月でTOEICが200点伸びた。それが一番大きかった。ほかには英語を生活に取り入れる習慣はついた。英語を学習することを日常に取り入れる意識は高まった。リーダーシップ的には計画を立てる、期限に間に合わせる、計画を立てて早めにやろうと。(HS3)
- ・自分の世界観が爆発的に広がった。目標を見つける力を身につけられた。一番はコミュニケーション能力があがった。冷たいかと思っていたタイの人はフレンドリーで親しみやすく、日本よりも暖かい。このコミュニケーション能力は将来就職しても役立てたい。(HS8)
- ・月一くらいで留学生との交流会とか、あったらよかったんじゃないか。あまり(留学生と)会わなかったのが、決めてもらったほうがよかったんじゃないかと思いました。(HS11)
- ・もう少し短期海外研修する前に自分のテーマに関して話す機会があればよかった。あらゆるところに情報収集を求めたのですが、事前に水の浄化について情報収集が難しいと分かっていたらアプローチの仕方が違っていた。(HS5)

⑩もしもう一度やるとしたら、どういうところを改善したいですか。

様々なアイデアが出た部分でもある。語学力に関するものが6件で、「イングリッシュ・ラウンジにもっと行く」、「英語力をもっと上げたい」、「帰国後英語を使う機会を増やしたい」、「タイ語をあらかじめやっておけばよかった」、「TOEICは9月(帰国後すぐ)受ける」、「TOEIC対策を帰国後対面でしてほしい」である。文化面では3件で、「日本の、またタイの文化をあらかじめもっと勉強しておけばよかった」、「(タイの)ホームステイをもっと長くしたかった」、と自国、そして相手の文化について知る必要性に対する気づきがあった。友人関係では2件で、「友達をもっと作ればよかった」、「ニュージーランドの学生と出会えたかった(語学学校は留学生のみのため)」、逆に「もっと一人でいろいろなことをしてみればよかった」と正直に後悔する声もあった。帰国後、さらに春休みのアメリカへの短期海外研修に参加した学生もいて、ニュージーランドでの経験を踏まえてより良いコミュニケーション戦略をたてる

ことができたようである。

- もう一回やるとしたら、かなり私はシャイなので、友達になるというか、話す内容、話題を見つけるのがたいへんで、一応連絡先はもらっても連絡先があるってうだけというのが多いので、度胸をつけて友達を多く増やせるようになりたい。オーバーにリアクションしたり、感情をもっと出せるように。…今回、(米国)メイン(州)に行った時もオーバーにしてみたら、そっちのほうがリアクション良かったので…二つの海外研修を通して役に立った。
- こっちでも、帰ってきてから英語を使う機会を増やしたほうがいい。それが英語力向上につながる。こちらで伸ばして行って、あちらで実践して、こっちに帰ってきたらまたやる、ということが理想かなと。一か月しかないので英語力が飛躍的に伸びるということではない。(HS1)
- もっと、一人でなんか、出歩いてみるというか、一人でなんかやってみればよかったかな。例えば、なにかちょっと自分はこのはやぶさで、友達が割と英語が喋れるとか、大学側でつけてくれた子が英語がうまいとか、タイ人だからとか、そういうのにちょっと甘えてしまって、自分でご飯を食べに行ったら自分でオーダーするとか、バスに乗るとか。私は割と人に頼ってしまったので…(HS12)

#### ⑪このプログラムであなたが成し遂げたこととは何ですか。

最も興味深い部分であり、語学に関する部分でもあったが、人格形成的な側面をとらえた答えが大勢を占めたのは興味深かった。「全部自分一人でやらなければならない(そしてできた達成感)」が2件、「修了研究・プレゼンテーションができた」が2件、ほかには「一番変わったのは受け入れようとする気持ち」、「100%(言葉で)伝えなくてもいい」、「自分が変われるというのがわかった」、「先生になった時、自分の海外研修経験を話せる」などが出た。

- 何事も全部一人でやらなくてはいけないので、積極的に生活しないともったいないなと思いました。いろんなところにいたり、自分から話しかけたり…。(HS4)
- 成し遂げたことは、全部一人でやるというか、ほんとに、全部アメリカ行った時と比べる感じになっちゃうんですけど、アメリカはホストファミリーが送ってくれるんですけど、ニュージーランドはバスに乗って、自分で行くし、常に学校に着くかどうか…一人でやれたことはよかった。(HS7)
- 達成でいうと、課題解決能力。自分で課題を設定してそれをどうにかして乗り越えていくということが、なかなかない経験。普段座学で授業受けていれば先生から教わる一方というのか、カシスの生産に足を運んで行ってみたい、ニュージーランドでできた友達に意見を聞いてみるだとか、そういうところを通して自分の見方を広げていくことができた。(HS5)
- 一番変わったのは受け入れようという気持ちが、いろいろな人に対して。日本にいとどうしても排他的になる。何人だから、というステレオタイプで見えちゃうが、あっちに行くとこちらが外国人だから、ふつうに偏見とかなくなった。…自分と触れ合った人は少なくとも。(HS1)
- 伝わらなければ言い換えたり、例を上げたり、コミュニケーションの小技を学んだ。100%自分の言いたいこと伝えられなくても、50%でも60%でも自分の言いたいこと伝えられればと考えられるようになった。ハードルを感じなくなった。…はやぶさカレッジ始まる前は英語でしか伝わらない人と英語で話すというのはなんか、冷や汗かいていたんですけど、完璧に伝えなくてもいいんだなと、今は英語でコミュニケーションするのに緊張しない、ラウンジのセミナーでも緊張しないで話せる。(HS10)

#### ⑫この経験をどのように役立てたいですか。

表現はそれぞれに違っていたが、「自分の周囲の人たちの意識を変える」が4件、座談会などの開催を含め「次の後輩たちやほかの人に自分の経験を伝えていきたい」が4件、「これからの語学力アップ、就活に役立てたい」が2件だった。教職を取っていた4人のうち、教職を取るのをやめたという人が3人

おり、正直でよいのだろうが少々気になった。中でも「女だから」のようなジェンダー的偏見は依然国内で若年層でさえも強いことにも懸念を抱いた。

- すごく小さいことなんですが、自分の周りの人の意識を変える。セクシャルマイノリティに対して、普通の人に対して、偏見に対して訂正をすることができるし、そういう見方だけじゃないよ、と周りに対して小さな影響を及ぼせる。社会を変えるとまではまだ現実味がない。(HS1)
- リーダーとして、海外に行くという大きな経験ができたので、その経験を伝えていきたい。海外に行く学生はいると思うので、その話を伝える。行ってみてわかったことも。海外の文化を伝える。ラウンジだけでなく、学部や研究室にいる留学生の方と積極的にコミュニケーションを取りたい。高校の時は英語苦手で、人から聞いて私も行きたいと思ったので、そういう具体的な目標があればできる。(HS10)
- 次の後輩に指導することはできると思います。将来の夢は教師になろうかと思っていたが、公務員にしよう。国際関係の公務員。高校中学生の海外派遣を進めるような仕事につきたい。教職取っていて先生が向いていないと。先生にならないのに、教職取ったらもったいない。日々の生活で十分な生活を送れない。男性なら本業だから。女なので。教職の授業を通して気づいた。(HS3)
- 自分の経験として、ぜんぶ就活の話とかになっちゃうんですけど、それにつなげられるようにしたいなど。就活はほかの人と戦うわけじゃないですか。そこで自分がどういう人間かというのを、このあとアメリカにも行ったのでそれとこれとこういう経験したというのを強みにしてTOEICとかも点数あげて行きたいなと思います。(HS7)

## 6. 新カリキュラム参加者の面接からの一考察

前プログラムから変更されて、エントリー制になったことで、日々の学生の学習の様子を見て考慮に入れることが可能になり、選抜の根拠、土台がより明確になった。英語教員としては、少数の学生を複数の教員の中で共有している珍しいプログラムであるので、意見交換する場もままあり、平等な立場からの各教員からの興味深い見解を聞くことができる。今回の面接では、その見解を確認する形となった。

ネイティブ英語教員や日本人英語教員による「英語で行われる授業」については一様にカレッジ生の満足度が高く、はやぶさカレッジのプログラム全体から見れば一部分ではあるが、イングリッシュ・ラウンジでの **Intercultural Communication** 科目は成功であったと考えてよい。語学力のみならず、外国語で話すときの自然な態度や習慣を身につけられたようだ。しかしながら、語学は、特殊な天賦の才能というよりはむしろ、日々の地道な努力、教員側からいえば日常的な学習の習慣をつけさせる取り組みに多くの部分が左右される活動である。カレッジの語学学習部分では、実地でセミナーやクラスを取る以外は、ウェブ上でのソフトウェアを使った日々の学習課題が各学生に与えられていて、それを担当教員がモニターすることができるのだが、カレッジプログラムの変更後間もないシステムであったことも相まって、はやぶさカレッジ4期の進捗度については個人差が大きく認められ、選抜された学生でも放置しておいては目標を忘れる、という苦い思いを筆者は個人的に味わい、今回の面接調査でもそれを再確認することとなった。日々の励ましや声掛けは地道なようであるが学生の動機付けには有効であり、教員としては忘れてはならないと自戒の念を新たにした。

前ははやぶさカレッジプログラムでは、学生の個人毎の日常的なメンタリングを行うなど大きな役割を果たしてきたイングリッシュ・ラウンジのバーマン先生は、しばしば **pay forward** という言葉を使う。大学から少人数に対する研修費不徴収の海外研修プログラムは国内では珍しく、ほかに類を見ない。本プログラム発足時に、「はやぶさカレッジ生は海外研修体験を全学の学生と分かちあうことで、国際感覚や文化体験を共有する」という教育目標が、文書にはなっていなかったこそすれ、繰り返し校長である本学学長から機会あるごとに語られていた言葉であったのだが、いつの間にかその意識がはやぶさカ

レッジ生の間ですっかり薄れてしまっているのは残念なことである。

はやぶさは基本的にリーダーシップ養成のプログラムであり、グローバル人材を育てることを目標にしている。わが青森県の誇る作家、太宰治が「選ばれてあることの恍惚と不安と二つ我にあり」と語った選民思想はこのはやぶさの中に *noblesse oblige* として生きている。同じくバーマン先生の *pay forward* とは、必ずしも恩を受けた人に恩返しをするのではなく、自分が受けた恩を今度は次の人に自分がよい行いをしてあげること、善意の先送りをするのであるが、まさにこの意識については世相もあってか、学生間に非常に希薄である。面接をしていて、この経験を生かしてよい就職をしたい、英語能力試験のスコアを上げたいなど、もちろんそれはそれで素晴らしい目標なのではあるが、個人的な到達目標を語るばかりで奨学金の広い意味を理解していないのは残念なことだ。自分たちの体験を周りとはシェアするのに座談会を開いてほしい、留学生ともっと交流する機会を開いてほしい、など他力本願的なコメントが見受けられたことも気にかかる。こうした特別な機会を与えられた少数のリーダーシッププログラム参加者としてはさらに大きな視野を持って、周囲を牽引していこうという意識がほしい。教員としても、その動機付けに気づかせるだけの働きかけが足りないのだろうと筆者が反省すること、しきりである。

とはいえ、海外研修を通じた多くの気づき、世界観の広がりにはやはり、目を見張るものがあった。紹介しきれなかった学生のコメントの中には、4週間という短い海外研修期間の中で課題の遂行、学部授業参加、地域社会の探訪など、よくぞこれだけのことをやってのけたと思われるものがあり、感服せざるを得ない。積極的に自分の目標に向かって邁進する人間だからこそ、選ばれたのだろうと思う。4週間という短い中では、語学習得のうえで何かを達成するところまでは程遠いが、多くのはやぶさ生が語っているように、世界観が変わり、多文化の受け入れ能力が高まり、人を受け入れることができるようになったという、大きな人格面での変革の機会となったことは確かなようだ。

自分でやってみてできた、一人でできた、という自己達成感の獲得という点もこのプログラムで見逃せない大きな点だと思う。自分の英語が通じた、ボディ・ランゲージや気持ちで通じた、など語学だけの達成感の範囲のものではない、相手の文化、自己の文化を理解することで、多様なものの見方が構築され、自己効力感を生み出した経験が多く語られ、プログラム参加者の中に散見されたのは大変うれしいことである。

また、1～3期のカレッジ生がすでにこのプログラムを修了しており、現在2018年の時点では4期生も修了している。このプログラムの起草の際、鹿嶋先生が参考にされたという北海道大学の新渡戸カレッジでは、フェローの制度があり、すでに各界で活躍するカレッジ修了生がフェローとしてアドバイスを現カレッジ生と共有するという制度がある。(ベネッセ教育総合研究所、2016) 面接の際にもこのような、縦のつながりを求める学生の声があったが、今後一考に値するのではないかと考えた。

## 7. おわりに

今回筆者が記したのは大きなHIROSAKIはやぶさカレッジのプログラム全体のなかで関わったほんの小さな一部分でしかない。それぞれご担当の先生方には筆者以上にはるかに大きな役割を果たされており、学生との交流やご苦労があり、それを筆者の担当部分だけの狭い一部の見解を紹介するのは気が引けるものがあったが、貴重な時間を割いて大事な体験を語ってもらった第4期はやぶさプログラム参加学生への感謝を込めて、一端を記すものである。このような指導の機会を与えてくださった、プログラムの創始者、弘前大学旧国際教育センター、現国際連携本部の鹿嶋彰先生ほか教職員の皆様方と旧国際教育センター、現教養教育開発実践センター所属のイングリッシュ・ラウンジの先生方に感謝して、この刷新に係る出来事を共有するものである。今後とも、ご指導ご鞭撻とともに叱咤激励をちょうだいできれば幸甚である。

## 参考文献

- Berman, S. J., Tada, M. (2016). Monitoring/mentoring vs. muddling/meddling finding the right tenor to nurture English for intercultural leadership honors students. *Conference Proceedings of The Joint International Conference of the 8th International Conference on ESP in Asia & the 3rd International Symposium on Innovative Teaching and Research in ESP in Japan, Tokyo, August 21, 2016*. Tokyo: UEC IGTEE Research Station. 1, 1–4. Retrieved from <http://www.shilab.bunka.uec.ac.jp/jointesp2016/proceedings/01%20Berman%201to4.pdf>
- Brewer, E., & Cunningham, K. (2009). Capturing Study Abroad's Transformative Potential. In Brewer, E., & Cunningham, K. (Eds.), *Integrating Study Abroad into The Curriculum, Theory and Practice Across the Disciplines*. [Kindle version]. (No.420/4599). Sterling, VA: Stylus Publishing.
- ベネッセ教育総合研究所. (2016). 大学 Evolution : 大学が拓く新しい学び 英語力と人間性を授業内外で育てるカリキュラムでグローバル・リーダーを育成する : 北海道大学・新渡戸カレッジ. View21 高校版. 2016(4), 42–45. ベネッセコーポレーション. Retrieved from [https://berd.benesse.jp/up\\_images/magazine/VIEW21\\_kou\\_2016\\_10\\_daigakuevolution.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_kou_2016_10_daigakuevolution.pdf)
- 中村裕昭、バーマン・シャーリー、バードセール・ブライアン、村山陽平、多田恵実、サンドウ・ロクサナ. (2015). 『弘前大学国際教育センター英語コミュニケーション部門活動報告書2012–2014年度』. 弘前市 : 弘前大学.

## 付録1

## はやぶさカレッジ対象セミナー選び方ガイド (2016)

	Monday	Tuesday	Thursday	Friday
担当	Hiroaki	Shari	Megumi	Brian
12時～13時 (時間は共通です)	Introduction to Academic English	Discover Hawaii	English at Work	Advanced English Communication
Level	Medium	Advanced	Medium	Advanced
Language/Culture	Language (Academic English)	Culture	Culture (Business)	Language

- ▶ はやぶさカレッジの学生12～13時のセミナーひとつを選んで応募用紙に記入してください。ほかのセミナーはすべて出欠自由ですが、記入したセミナーについては出席の義務があります。
- ▶ セミナーのほかにイングリッシュ・セントラルというソフトウェアで自習することが義務付けられます。セミナー共通の教材として4か月分の会員権を購入してもらいます（後日説明の機会を設けます）。
- ▶ 上のレベルや主目的（言語中心か文化中心）はあくまで相対的なものですので自身で判断してください。

## 付録2

## 多文化環境での共生力、異文化理解などに関する科目について

本学開講科目のうち、1年次後期に、次の授業科目から2科目選択し、履修してください。  
なお、修得した単位は、教養教育科目の修得すべき単位として数えることができます。

区分	授業科目	備考
教養教育科目	グローバル社会・経済 —比較金融システム—	※1
	国際地域 —近代の世界史—	
	国際地域 —アフリカ入門A—	
	国際地域 —ラテンアメリカとカリブ海—	
	国際地域 —アレクサンドリア（知のグローバリゼーション）	
	比較文化 —アジア・欧州の交流から見る国語学の形成—	
	比較文化 —世界と日本のアニメ—	
	比較文化 —世界の映画史—	※2
	地球環境 —21世紀の地球環境問題①—	
	地球環境 —21世紀の地球環境問題②—	
	地球環境 —21世紀の地球環境問題③—	
	地球環境 —気候変動と現代社会—	
	日本—日本の消費文化—	
	日本—日本文学とアイデンティティの形成—	
	日本—津軽近代文学史—	
	日本—日本の女性による文学—	
	日本—学習中のコミュニケーション—	
人文社会学科学部 専門教育科目	国際共生論A	

※1は多文化のみ、※2は言語コースのみ選択可能とする。